

本当に智慧のある者は、邪心を抱かないものであることを思え。将たる人は申すまでもないことであるが、事業の草創（新しく物事を始めること）に携わるような者についても、いかなる場合も無智であつては成就することが難しい。心を明鏡の如くに磨いて物事に疑いを持たないこと。博く衆人を愛して親疎なく、その扱いが偏つていて公正を欠くようなことがなく、等しく馴れ親しんでいながらも、その人々が優れているか、そうでないかをも量り知れるようになければならない。健康で勇気があり正義感と英智に富んでいながらも思慮深く、事に当たっては意図を決し、上級者を敬い下級者を慈しみ、邪陰（相手の気持ちをくみ取れずに、意地悪くむごいこと）な言葉遣いをしない人物、これこそが「上の武士」である。厳正な態度で勤め、一見して勇気があり、芸才に富んでいるかのように見える者がいたとしても、多欲であり、或いは智慧に乏しく、道理にくらく愚かであつて、義に従うことを当然と心得ていないようであつては「中の武士」である。勇氣は血氣に随い、或いは果敢にしてその身を顧みない者であつたとしても、君命を拝受するに臨んで、潔く死を決心することができず、未練にして不覚をとるようであつては「下の武士」である。己のこのみを貪つて、廉直な（心がきれいで私欲が無く、曲がった事をしない）朋友を嫌い、偽りが多くて利欲に暗く、義を疑い、功を妬み、恥を知らないようであつては、「人に非（あら）ず」ということを知らねばならない。この「人に非ざる者」であつても見捨てることなく、牛馬を用いるようにしてその能力を引き出すように用いるべきである。

主将の心が悪ければ、人に非ざる者を臣とし、親しんで愛し、立派な人物を遠ざけて、我心のほしいままに振る舞う。このようなことを邪智という。邪智によって国が滅び、家が破壊されるだけではない。万人の嘲りを受けて後代に恥をさらすことになる。数多くの武士に俸禄を支給して臣下にしていようと、皆が心を開いて服従しているなどと推察したり思ったりしてはならない。代々仕えてきた郎等（主家との血縁関係も無く、領地も持たない家来）など多くの家来たちの中にも、友として交わり愛

すべき人も必ずいる。師として尊ぶべき人も必ずいる。その智能は新しいか古いかにこだわらるべきではない。人の上に立つべき全ての者は、頑（かたく）なであっては成り難い。智はより博いものであることを欲し、たった一人の志士をも無闇に捨ててはならない。ましてや、千万人の志士については言うまでもない。人の怨みが押し寄せるところ（事象）こそが、我が智を集中して發揮すべきところでもある。

智士と勇士と義士とは国の宝である。智士が遺恨を抱くような時には国家の能力は皆尽きてしまい、勇士が遺恨を抱くような時には国が傾き、義士が遺恨を抱くような時には国中が乱れる。こうした国の宝を棄ててしまい、（智士、勇士、義士の）三士が皆背いたならば、諸人は皆（己の）敵だと思わなければならない。諸人の心をよく察して、国家を治め、軍隊を保持し、君室をも輔弼（ほひつ）支えてたすけること）すべきである。一言の好みによつて命を捨て、一言の怨みによつて害心をも起こすのは、兵の習性である。突然の軽はずみな一言で人の心を破るのは、実に浅薄な智の致すところである。ただし、不賞の賞、不罰の罰といったように、実際の賞罰行為を伴わないで相手を褒めたり、諫めたりするための一言は時によつては必要となる。口伝。